北の人名録

北の人名録

倉本聰

新潮社版

北の人名録

昭和五十七年三月十五日発行
昭和五十七年十月二十五日十七刷

著者　倉本聰

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社　郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四一一
振替　東京四—八〇八番

印刷　株式会社金羊社

製本　大口製本株式会社

定価九五〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Sō Kuramoto, Printed in Japan, 1982

愛する北の人々へ――

雨ダカラト飲ミ
風ダカラト飲ミ
雪モ夏ノ暑サモ飲ム口実
丈夫ナ胃腸ヲモチ
欲ハアリ
決シテアセラズ
イツモニヤニヤ笑ッテイル
一日ニ白米四合ト
ミソトカナリノ野菜デモ足リズ
アラユルコトニ
ジブンヲ目立タスベク
ヨク研究シワカリ
ケド目立チソコナイ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
カラートタンノ家ニイテ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

東ニ不審ナ火事アレバ
行ッテタダワイワイサワギタテ
西ニ疲レタ未亡人アレバ
下心カクシテヤサシクシ
南ニ落込ンダ男アレバ
行ッテサラニソノ足ヲヒッパリ
北ニケンカヤソショウガアレバ
面白イカラモットヤレトイイ
ヒデリノトキハステテコ一枚
サムサノフユハガチガチフルエ
ミンナニ純粋ナバカダトヨバレ
呆レ果テラレ
デモ苦ニハサレズ
ソウイウモノガ
ココラニハイル

北の人名録＊目次

北海ヘソ縁起　11
いるかい　14
山口　22
「夢か」　34
メロン崩れたり　47
冬将軍馳ける　61
アウト　78
煙、たなびく　97

闇鍋の夜　115
ありンす　136
さらば、リンさん　154
ああ！　流氷　167
北大神田書店　183
赤頭巾ちゃん、起さないで　199
フィーバー・空知川　213
雪虫の朝　230

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

北の人名録

北海ヘソ縁起

つい最近まで誤認していた。

恥かしい話だが、ヘソの緒についてである。ヘソの緒は、赤子のヘソと母体のヘソをつないでいると愚かにも四十年錯覚していた。だから、母親のヘソの内側には、産んだ子の数だけ、細くひからびたヘソの緒の切れはしが下っていて、従って母体を解剖すれば何人子供を産んだかなどはたちどころに判ると考えていた。

そう話したら笑わなかった。二十五歳の人妻がである。ヒラさんのかあちゃんは真面目な顔で「あらそうなの」と呟いた。

窓の外はしんしんと雪である。

北海道富良野。

フラノと読むがアイヌ語のフラヌイの当て字である。フラヌイは「硫黄の匂う所」の意である。倭人はそうは定義しない。倭人の定義は「ヘソの町」である。

十年程前、ここは町から市になった。市になった以上、何か売り物が欲しかった。此処には売るべき名物がなかった。何かあらねばならなかった。市の要人は鳩首談合した。

富良野は北海道の中央にある。
まん中である。どまんなかである。人で云えば即ちヘソである。ヘソで売ろうということになった。
富良野小学校の校庭に、折しも明治末、地球の重力と天体を測定するための機械をとりつけた床盤が遺っていた。これがヘソとなった。その上に「ヘソの碑」が建てられた。続いて市内に「ヘソ神社」が出来た。笑ってはいけない。
僕はかつて長崎で市の要人と博物館員のもめるのを目撃して変に感心した記憶がある。「グラバー邸を蝶々夫人とドッキングさせたとはありゃ誰や」「そいはおいの責任じゃなかばい」「まァ昔色々あったっちゃろ」
「ヘソ神社」が出来てしばらくすると近在から子供が産れた時にそのヘソの緒を納める者が出てきた。即ち縁起の発生である。
市の重鎮は破顔した。信仰に祭典はつきものである。神社に祭はなくてはならない。かくて「北海ヘソ祭り」は誕生する。
ヘソを中心に、腹に顔を描いて踊るべしという宴会でよくやるアレである。あれを町ぐるみでやろうということになった。これには反対する要人もいた。「下品でないべか」という論である。「そんなこと云ってらんないっしょう！　やるさ！」
祭の主題歌「北海ヘソ音頭」誕生。曰く、ヘハアー　まんなかまなかのどまんなかよ、おらが富良野で見せたいものは蝦夷のまなかのデベソ石。
幕を開けると大評判を呼んだ。第一素朴でユニークである。それに何より陽気でおかしい。マスコミ各社が取材に来て、ヘソ祭りは一躍有名になった。

と。忽ちにして市は悪のりを開始した。市内に名所が続々と出来た。曰く、「ヘソ松」「ヘソ岩」「ヘソ沼」etc——

かかる話をきいて興奮せぬ男は男でない。

と僕は思う。

それが証拠に僕はこの町に感動し、遂に家を建て住みついてしまった。僕には云う権利があるのである。ここには大らかなユーモアとロマンがある。

全市民が一致団結した。

ためしに国道38号線を富良野へ向かって走って見給え。「これより富良野。ヘソの町です」とある。国鉄富良野駅にも「ヘソの町富良野」。町の菓子屋にも「ヘソまんじゅう」「へそくりまんじゅう」「へそおどり」更には銘菓「どまんなか」！ 市の会館の食堂には「ヘソ丼」そして今や北海へそ音頭は将にレコーディングされんとし、市中の小山には高崎や大船に比肩する巨大なヘソ観音が建てられんとしている。そしてその観音の台座には、恐らく本邦初という大規模な納ヘソの緒堂が計画されているという！ さァどうだ！

外は音もなく雪が舞っている。気温はマイナス16度。炉にバチバチと木がはぜている。

ヒラさんが急に声をひそめた。

「だけど校庭のあのヘソの碑。あれ本当はウソではないかって云うンだよネ。北海道の本当の中心は、富良野小学校の校庭でなくて校舎の便所だって説あるもンネ。けど便所だとうまくないっしょう」

上川留萌地方。明日も雪。

いるかい

たとえば山奥の村へ行くにはたいがい谷あいの道が一本。その道が舗装されアスファルトになるときまって村は過疎になるという。

そういう新説をチャバは唱えた。

本当かねというとチャバは男っぽいくせにそこだけ妙に可愛らしい長いまつげをしばたたいて、本当だもン。おらとこの麓郷がそうだもン。もン、という語尾を愛らしくはねあげるこっちの訛りですねてみせた。

そうなんだそうである。何故だい。何故だべな。アスファルトが悪いのか。判らないけどアスファルトになると村の若いのはその道通って都会に行きたくなるんではないかい。

とにかく現実にそうなんだそうだ。

北海道ではどこだってそだもン。

チャバには美しい奥さんと、三人の可愛いお子さんがいる。

チャバは麓郷の電機屋さんである。同時に消防団員でもある。同時にかなり飲んべぇで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com